

# 政治における根源悪——政治思想史的考察

添 谷 育 志

## \*これまでの研究概要とこれからの展望

私の研究分野は近現代英国における政治思想、とりわけトマス・ホップズからマイケル・オークショットに到る政治思想家の研究であり、大学院生時代から一貫してこの研究テーマに取り組んできた。周知のごとくトマス・ホップズは近代国家論の定礎者であり、マイケル・オークショットは『リヴァイアサン序説』（中金 聡訳、法政大学出版局）において『リヴァイアサン』についての斬新な解釈を行うとともに、同書に収録された「シュトラウス博士のホップズ研究」では、ドイツ系亡命ユダヤ人レオ・シュトラウスのホップズ研究（翻訳③）を高く評価している。このように私の研究はホップズ、シュトラウス、オークショットという三人の思想家を中心に行われていると言える。

まず(1)ホップズ研究としては（共著、共編著①、論文①、②、紹介①）があるが、とくに論文①、②が重要である。本論文において私は翻訳③に示されたシュトラウスによるホップズ解釈——自然科学的解釈の否定、人文主義期の重視、「貴族の徳とブルジョワの徳」の対比——を手掛かりにしながら、アレクサンドル・コジエヴのヘーゲル解釈（『ヘーゲル精神現象学読解』）——「主と僕の弁証法」の独特な解釈——を補助線に用いつつ、近代性（モダニティ）の根底にある自己—他者関係のあり方を明らかにしている。

ついで(2)オークショット研究としては（翻訳②、共著、共編著③、⑤、⑨、論文④、⑥、⑦および紹介⑤）があるが、とくに重要なのは論文④、⑥、⑦および紹介⑤である。わが国ではあまり知名度は高くないが、オークショットはアイザイア・バーリンと並ぶ現代英国を代表する政治哲学者であり、シュトラウス学派（Straussean）と並ぶ「学派（Oakeshottean）」を形成した人物である。上記論文において私は、難解なオークショットの処女作『経験とその諸様態（Experience and Its Modes）』から『政治における合理主義（Rationalism in Politics）』や『人間営為論（On Human Conduct）』に到る思想的展開を、綿密なテキスト読解と時代的コンテクスト（英国理想主義という思想風土、集産主義批判、分析哲学の台頭）の再構築にもとづき英国政治思想のなかに正確に位置づけた。本研究はわが国におけるその後のオークショット研究にとってのひとつの羅針盤となっている。また共編著⑨はオークショットの第二次世界大戦経験に着目して、『人間営為論』における「企業的国家」と「公民的国家」との二分法について独自の解釈を示したものである。

最後に(3)シュトラウス研究としては共著④、論文⑧、⑫があるが、とくに重要なのは共著④である。シュトラウスの諸著作は早稲田大学政治経済学部の飯島昇蔵教授および摂南大学国際学部名誉教授石崎義彦名誉教授を中心とするグループによって翻訳・刊行されている。翻訳③はわが

国における最初の、ドイツ語原版からのシュトラウス翻訳であり、本論文はその翻訳経験を生かしながらシュトラウスの思想を(1)「古代人と近代人の論争＝自然と哲学の問題＝新旧論争」、(2)「哲学と聖書の宗教の論争＝神学—政治論争＝啓示と理性＝イェルサレムとアテネ」、(3)「真理と美＝真剣さと悦び」という三つの視点から分析したものである。ともすれば古代ギリシアへの回帰を説く伝統主義者とみなされがちなシュトラウスの本来的意図が、むしろ脱近代すなわち「歴史＝時間の外部」を志向するものでありポストモダンとの親近性があると指摘している。発表当時この指摘は斬新なものとして高く評価された。

(文中○内の数字は、下記「研究業績一覧」の数字である)。

\*\*\*

私の研究歴は上記のようなものだが、その際に私にとって研究の導きの糸となったのは古代ギリシアの哲学者エピクロスとローマ帝国皇帝フラウィウス・クラウデス・ユリアヌスであった。こう書くと意外の感を抱く人もいるかもしれない。しかし私が研究者への道を歩みはじめたのが、1968年であることを思えばその含意は理解していただけたと思う。1968年前後はグローバルな「学生運動」の時代だった。その最中であって私たちは、大学の「研究者」であることをたえず「問い直す」こと（「自己批判」「自己否定」）を迫られた。また「学生運動」という熱狂主義（ファナティズム）に違和感を覚えた者にとって、西欧の知識人たちにとって狂信との戦いの永遠のシンボルだったユリアヌスに共感するのは当然のことだった。

たとえばギボンが次のように書いている。

《だが、ただ如何せん不羈独往の彼（ユリアヌス）の精神は、高慢で横柄な聖職者たちが信仰の名によって要求する無抵抗盲従の信徒に対しては、強くこれを拒んだ。事実、彼等聖職者たちはその思弁の見解を、あたかも実定的な法律であるかのごとく強要したばかりか、拒めばたちまち永劫の罰という威嚇でこれを衛るのだった》〔エドワード・ギボン『ローマ帝国衰亡史3』（中野好夫訳、ちくま学芸文庫、448-9頁）を参照。その他ユリアヌス伝としてはG・W・パワソック『背教者ユリアヌス』（新田一郎訳、思索社、1986年）およびメレシコフスキイの「歴史ロマン三部作—キリストと反キリスト」の一冊『背教者ユリアヌス—神々の死』（米川正夫訳、河出書房新社、1968年）、Gore Vidal, *Julian: A Novel*, Vintage, 2003などがある〕。

こうしたユリアヌスによる初期キリスト教という狂信に対する批判は、「異教崇拜」というもうひとつの狂信に陥っているのではないかと、そうギボンは考えているようだ。だがある意味で常套的なこうしたユリアヌス観に対して、「永遠なるローマ」の守護者、あるいは統治者として彼を一貫して賛美したのは辻邦夫の『背教者ユリアヌス』だった。この小説が月刊雑誌『海』（中央公論社）に掲載されたのは1969年のことだった。毎月この小説を読むためにだけ、発売日には書店に駆けつけたことをいまでも覚えている。

本稿を執筆するために文庫版を読み返した。学生のころにはユリアヌスが想いをよせる（コン

スタンティウス二世の皇妃) エウセビアや軽業師ディアにばかり関心があったが、今回読み返してみても一番重要なのは次のような一節に含まれるユリアヌス=辻の「秩序」観であることに気づいた。

《「ローマの魂はギリシア古来の神々のなかにも求められる」ユリアヌスはこうした告示文のなかで書いた。「しかしローマはすべての存在にそのあるがままの本性における存続を許すのだ。この事実によってローマの秩序が実現されているのだ。ローマとは各自が自己を主張しつつ共存する自由にはかならず。私が宗教の寛容を許すのは、かかるローマの精神に基づいているからだ。諸君は諸君自らの主張に立ちつつ、ローマの秩序に服さねばならぬ理由もそこにある」……(中略)……だが、ユリアヌスはアブロン(キリスト教の司教)のように、絶対の正義のために現在の秩序と平和を乱す気にはならなかった》(中公文庫、下巻、259-60頁。( )内は引用者補足、強調も同様)。

ついでに言えば、このころの『海』には永井陽之助、山口昌男、蓮実重彦などなど錚々たる執筆者が名をつらね、その充実ぶりは目をみはるほどだった。これら執筆者のひとりである永井氏が編集・解説した『現代人の思想 政治的人間』(平凡社、1968年)は、いまだに政治学・政治理論に関する最良のアンソロジーである。私自身のオークショットへの傾倒は、本書に収録されたLSE教授主任講演「政治教育」(阿部四郎訳)なしには不可能だった。本書から私が学んだのも政治社会における最優先事項としての「秩序」という考え方だった。しかしながらわが国においてそういう考え方がわずかに垣間見えるのは、押村高氏の『国際政治思想——生存・秩序・正義』(勁草書房)と刈部直氏の『秩序の夢——政治思想論集——』(筑摩書房)を数えるだけというのはいかにもさびしいではないか？

ところで最近になって私はユリアヌスに匹敵する、初期キリスト教という狂信に対して果敢に挑んだもうひとりのヒロインを発見した。四世紀末から五世紀初めにかけてアレクサンドリアで活躍した美貌の天才的数学者・天文学者・哲学者ヒュパティアである。彼女の悲惨な生涯についてはレイチェル・ワイズ主演の名画『アレクサンドリア(原題:Agora)』によってよく知られていると思う。またチャールズ・キングズレーによる伝記も『ハイベシア』(村岡勇三訳、春秋社、1924年。国立国会図書館デジタルライブラリーから入手可能。同書の新訳は<http://homepage1.nifty.com/suzuri/hypatia/hypatia00.html>より入手可能)として出版されている。またデレク・フラワー『知識の灯台——古代アレクサンドリア図書館の物語』(柴田和雄訳、柏書房、2003年)も彼女について一章を割いている。

もっとも信頼できる史料(ソクラテス=スコラティスコス『教会史』第七巻、第15章)によれば、ユダヤ教徒、初期キリスト教徒(とりわけ総司教キュリロス)そしてローマ帝国の行政権力(かつて彼女の愛弟子だった長官オレストア)が反目するなかで、この美貌のヒロインを襲った最期については次のように記述されている。

《すべての男たちが彼女の非凡な品位と徳性のゆえに、彼女をさらに認めていたのである。彼

女が頻繁にオレステアに面会していたので、オレステアがかの司教と和解することを妨げているのは彼女だと、キリスト教徒の間では中傷的に報じられていたのだ。それゆえそのなかの何人かが、獐猛で凝り固まった熱意に駆り立てられた。その首謀者はペトロスといい、彼女が家に帰るのを待ち伏せ、彼女を馬車から引きずり出し、カエサリオンと呼ばれる教会へと彼女を連れ去った。そこで彼らは彼女を真っ裸にし、それから瓦で彼女を殺害したのである。彼女の遺体を細切れに引き裂いた後、彼らはずたずたにした四肢をキナロンと呼ばれる場所に置き、そこで燃やした。この事件は、キュリロスだけではなく、アレクサンドリア教会全体にとりわけ不名誉をもたらした。間違いなく、虐殺や闘争、そしてそうした類いの行為を許容することはキリスト教の精神からもっともかけ離れているのだ。このことはホノリウス帝が10回目の執政官、テオドシウス帝が6回目の執政官、キュリロスの司教位4年目に、四旬節の間、三月（紀元後415年）に起こった》〔大谷 哲「史料翻訳：ソクラテス＝スコラティスコス『教会史』第七巻第13-15章—ヒュパティアの死に寄せて—」（「ヨーロッパ歴史資源アーカイブプロジェクト：[http://researchmap.jp/mui7inxvo-28455/#\\_28544](http://researchmap.jp/mui7inxvo-28455/#_28544)）に拠る。表記を一部改変〕。

ギボン以降、彼女は「牡蠣殻で肉を抉り取られた」とされているのは誤伝らしい。また彼女のファンと思しきカール・セーガンも、ヒュパティアを「非常に美人だった」と述べたうえで彼女の最期を「（彼女を）馬車から引き降ろし、着物を引き裂き、アワビの貝がらで彼女の肉を骨からはがした」（『コスモス 下』朝日文庫、308頁）と述べている。いずれにせよキリスト教徒によって彼女に加えられた行為の残酷さの程度については、変わりはない。なおヒュパティアは最近ではその自然科学上のフェミニストの先駆者として再評価されている〔マーガレット・アーリック『男装の科学者たち：ヒュピアスからマリー・キュリーへ』（上平初穂ほか訳、北海道大学図書刊行会、1999年）を参照。またMichael A. B. Deakin, *Hypatia of Alexandria: Mathematician and Martyr*, New York: Prometheus Books, 2007. は第一次資料の英訳を含む優れた著作である〕。

ところでユリアヌスが排斥したエピクロス——「エピクロス派や懐疑派などの瀆神的教説は、厳にこれらを侮蔑をもって嫌忌しなければならぬが、他方ピタゴラスやプラトン、ストア派などの学説は、逆に孜孜として学習を励まねばならぬ」（ギボン、同上書、471頁）——は私のなかでどう両立したのだろうか？私が東北大学大学院法学研究科に提出した修士論文は『カール・マルクス試論—思想の実践とは何か』と題されている。本論文の結論は「マルクスにとって思想の実践とは『資本論』を書くことだった」という身もふたもない、小林秀雄の評論「マルクスの悟達」からのほとんど剽窃に近いものだった。幸いにもそれに気づく審査員がいなかったので、博士課程に進むことができた。この論文に取り組むなかで私は、マルクスの学位論文「デモクリトスの自然哲学とエピクロスの自然哲学の差異」を通してエピクロスの思想に出会った。マルクスはデモクリトスの原子論を修正したエピクロスの「偏倚＝斜行運動（クリナメン＝Swerve）」という考え方のなかに、機械的決定論（アトムsの直線落下運動）から解放された人間的「自由」の発端をみいだした〔なおマルクスにとってのエピクロス哲学の意義については、フランシース・マルコヴィッツ『エピクロスの園のマルクス』（小井戸光彦訳、法政大学出版局、2010年）を参照さ

りたい]。私にとってエピクロスはなによりも「自由」、「寛容」、「多様性」そして「人間の可死性（モータリティ）」の擁護者と思われたのであった。

すなわち私にとってエピクロスは、死すべき人間に対して「神の国」での永遠の生命を保証すると称して、みずからの生命を投げ出すことを強要する、あるいは他者を殺害することさえをも教唆する狂信に対する批判者だった。ともすれば死に傾きがちだった若い私にとって、エピクロスの徹底した世俗主義とトーマス・マンの『魔の山』は大げさに言えばひとつの救いだったのだ。

そういうわけで今後は、西欧の政治思想に脈々と流れる「エピキュリアン・モーメント」とでも言うべき思想的契機を、リベラリズムの歴史と交差させながら探究することを研究課題とした。最後にわが国における唯一のエピキュリアンと言うべき林達夫から引用する。

《私は一箇の貧しきエピキュリアンにすぎない。……（中略）……私はこれまで見たこともない怪奇な観念的凶器をふりかざして大道を闊歩する思想的テロリストや、そのあとに随いてまわる得体のしれぬ「護符」の押売り屋の難を避けるため、わが家の周りにささやかな垣根をめぐらして、なるべく人目につかぬように暮らしていた。私は己が身のほどに合った最小限の自由、すなわち怪物と狂行とから身を隔離する自由、そして幾坪かの畑に蔬菜をつくるとともに、庭前に一本の薔薇ひとつもとの木にせめて少しばかりの花を咲かせたい自由を確保しようとする以外に、何の希望も抱かなかった》（『歴史の暮方』「序」）。

#### \* 出発点としてのホッブズ—暴力による死の恐怖、潜在的殺人者としての他者への恐怖

《政治学の視線が本質的な変化をとげたのである。マキアヴェリは政治的行動に、モアは社会的秩序に関心をもっているが、それはもはや、市民たちの有徳な生活をめざして展開されるものではない。これらの近代的思想家は、もはや古代の思想家のように、善く優れた生活にみちびく倫理的連関を問題にしているのではなく、人間の生存維持のための事実的な条件をたずねている。身体的生命の主張、基本的な生存維持が、直接に問題になってきた。この実践的必要は、技術的な解決を求めているのであって、それが近代的社会哲学の発端をなしている。……

（中略）……古代の思想家の理論的に基礎づけられた出発点は、人間はどのようにして自然的秩序に実践的に即応しうるか、という問いであった。これに反して、近代の思想家に実践的に課せられている出発点は、人間はどのようにして自然災厄（Naturübel）の脅威を技術的に克服しうるか、という問いなのである。……（中略）……社会哲学は、この種の自然災厄をさほど数多く発見したわけではない。それはマキアヴェリとモアが出発点とした二つの災厄を、幾世期にもわたって変奏しつづけただけである。その二つとは、隣人の手による非業の死（*der gewaltsamen Tod durch die Hand der Nächsten*）と餓死（Hunger）である》（ユルゲン・ハーバーマス『社会哲学論集——政治における理論と実践——（I）』（細谷貞夫訳、未来社、1999年；*Theorie und Praxis: Sozialphilosophische Studien*, Suhrkamp Taschenbuch, 2014, S. 57.）

マキアヴェリ⇒ホッブズ⇒ロック⇒ルソー⇒ベンサム⇒ミル……（政治学）

定例研究会

モア⇒マンデヴィル⇒スミス⇒マルサス⇒リカード⇒マルクス……（経済学）

（後者の系譜についてはロバート・ハイルブローナー『入門経済思想史—世俗的思想家たち』〔八木甫ほか訳、ちくま学芸文庫〕が最良のガイドブック）

\*ハーバースがいう「本質的な変化」をもたらしたのは、「自然法思想によって構成されていた徳の秩序の絆が引き裂かれたために、現実において分裂していた二つの要素——すなわち至上権を得た君主の支配権（dominium）と、領邦国家の管理下で私的に営まれている社会生活（societas）——は、理論の上でも離ればなれになる。ニコロ・マキアヴェリが『君主論』を書き上げたその同じ年〔1514年〕に、トマス・モアが彼の『ユートピア』を執筆していた」（同上、23頁、〔 〕内は引用者補足）。

\*その後の西ヨーロッパ社会における決定的な出来事は「30年戦争」（1618–48年）。宗教戦争がもたらした悲惨さのなかでさまざまな「リベラルであること」の構想（the conceptions of being liberal）への探求がはじまる。

\*シュクラールの「恐怖のリベラリズム（The Liberalism of Fear）」（Judith N. Shklar, “The Liberalism of Fear”, in: *Political Thought and Political Thinkers*, The University of Chicago Press, 1998）

「記憶の党派」←→「希望の党派」（Cf. Ralph Waldo Emerson, *The Conservative*）⇒

「自然権のリベラリズム」（ロック）⇒「前もって確立された理念的な規範秩序に——自然の秩序であれ神の秩序であれ——不断に従うことを気遣う」タイプ。

「人格的発展のリベラリズム」（ミル）⇒「自由は社会の進歩にとってばかりではなく、個の進歩にとっても必要不可欠である」と考えるタイプ。

↓

《しかしながら、リベラリズムにかんするこの二人の守護聖人のどちらにしても、説得力あるしかたで展開された歴史的記憶を有していないと言わなければならない。そして、まさにこの〔歴史を記憶するという〕人間精神の能力にこそ、恐怖のリベラリズムは大いに依拠しているのである》〔ジュディス・シュクラール「恐怖のリベラリズム」（大川正彦訳、『現代思想』、2001年6月号、126頁）〕

《リベラリズムのもっとも深い基礎と認められてしかるべき場所は、当初から、もっとも早く寛容を擁護した者たちがいだいた確信のうちにある。すなわち、身の毛もよだつ恐怖のなかから生まれてきた確信、残酷さこそ絶対悪、神や人類への攻撃であるという確信である。こうした伝統からこそ、政治的な意味での恐怖のリベラリズムの主張は生じてきたのであり、わたしたちの時代のテロルのただなかであって、重要性をもちつづけているのである》〔同上、122頁〕

《恐怖のリベラリズムが〈共通悪〉から出発しているのはたしかである。〈共通悪〉とは、わたしたちみな知っており、できれば避けようと望んでいる悪のことである。その悪は、残酷さであり、この残酷さが惹き起こす恐怖であり、恐怖そのものについての恐怖でもある。そ

のかぎりにおいて恐怖のリベラリズムは、歴史的にみればかならずそうであったように、一種の普遍的な要求を、とりわけ世界市民としての立場からの要求をかかげる》〔同上、128頁〕

\*紛争を引き起こしているのは「記憶」の過剰なのか、それとも適度な「忘却」の不足なのか？

《The wars of Yugoslav Succession were inflamed by remembrance—above all the Serb remembrance of the defeat at Kosovo Polje ( Kosovo 盆地) in 1389. In the hills of Bosnia, I learned to hate, but above all to fear collective historical memory. In its appropriation of history, which had been my abiding passion and refuge since childhood, collective memory made history itself seem like nothing so much as an arsenal full of the weapons needed to keep wars going or peace tenuous and cold. What I saw after Bosnia, in Rwanda, in Kosovo, in Israel-Palestine, and in Iraq, gave me no basis for changing my mind. This book is the product of that alarm.》〔David Rieff, *Against Remembrance*, Dublin: The Liffey Press, 2011, p.x.〕

\* Liberal Ideas of Freedom (非干渉、消極的自由) ; Communitarian Idea of Freedom (共同体の美德、ほんものの自我) ; Republican Idea of Freedom (支配の欠如 = nondomination = スキナー、ベティット = 都市の自由 ↔ 荒野の自由) ; Conservative Idea of Freedom (法の支配) ; Socialist Idea of Freedom (自己支配、積極的自由) ; Neo-liberal Idea of Freedom (政府からの自由) ; Libertarian Idea of Freedom (人生の多様性の擁護、画一性の排除 = ノージック) ; Anarchist Idea of Freedom (「社会を徹底的且つ急激に変革する可能性にたいする信念と人間の合理的な性質、そして、人間の自己改善と自己完成の可能性にたいする信頼とをあわせもっている」、「ユートピア的、千年王国的な宗教運動の嫡子」、「啓蒙主義が生みおとした私生児」、「アナキズムは、宗教的な信条であると同時に、合理的な哲学でもある」、ジェームズ・ジョル『アナキスト』萩原延壽・野水瑞穂訳、岩波書店、1975年、3-4頁；「あらゆる権威の否定」、「自由な個人の結合による社会」、「人間の人間による統治の拒絶」、ジョージ・ウッドコック『アナキズム I 思想編』白井厚訳、紀伊国屋書店、1973年：要するに「自治と自律」) ……etc.

\* ヒレア・ベロック『奴隷の国家』(原著：Hilaire Belloc, *The Servile State*, 1913=1946, 2007, New York: Cosimo；『奴隷の国家』関 曠野訳・解説、大田出版、2000年) の重要性 = 反資本主義・反集産主義のリベラリズム = カソリック的分配主義

Cf. Kenneth Minogue, *The Servile Mind: How Democracy Erodes The Moral Life*, Encounter Book: New York, 2012 ↔ *The Liberal Mind: A Critical Analysis of The Philosophy of Liberalism and Its Political Effect*, A Vintage Books: New York, 1963.

《富の生産に対する統制は、人間生活それ自体に対する統制である——ヒレア・ベロック》(ハイエク『隷従への道』、第七章のエピグラム)

《彼(ベロック)の資本主義とそれを補完する福祉国家に対する批判はカトリックの思想家によく見られる新しい中世への渴仰といったものとは関係ない。彼は「人間は法によって自由

定例研究会

なる」というヨーロッパの偉大な法思想の伝統に立って近代社会を批判しており、その反時代的な批判の根底にあるのはカトリシズムではなく法の理念である》(関 曠野『フクシマ以後—エネルギー・通貨・主権』青土社、192頁)

“The real opposite of servility is individuality, as it has long been understood in European Thought.” (*The Servile Mind*, p.6.) ⇒オークショットの「個人であること」、「法の支配」、「公民的結社」

#### \* Epicurean Idea of Freedomの可能性?

《大きな悪が避けられておれば、無上の喜びが生まれる。そして、これこそが善の本性である。もしわれわれが、このことを正しく把握し、ついで、これを固く守り、決して、善を主題としておしゃべりしながらむなしく散歩するようなことをしないならば》(エピクロス「断片(その二)」、『エピクロス——教説と手紙』(出隆・岩崎充胤訳、岩波文庫、120頁)

《必然性のうちに生きるのは不幸である。しかし必然性のうちに生きるのはなんら必然ではない。自由へと通じる多数の道が、しかも短く容易な道が、いたるところに開けているのだ。だからだれも生のうちに縛られえないことを、神に感謝しよう。必然性そのものを飼いならすこともできるのであると……エピクロスは言った》〔セネカ『道徳書簡集』、カール・マルクス「デモクリトスの自然哲学とエピクロスの自然哲学の差異」、『マルクス・コレクション I』(筑摩書房、2005年、44頁より引用)〕

《正義は、それ自体で存する或るものではない。それはむしろ、いつどんな場所でもせよ、人間の相互的な交通のさいに、互いに加害したり加害されたりしないことにかんして結ばれる一種の契約である》(エピクロス「主要教説33」、同上邦訳、83頁) ⇒コンヴェンショナリズム

《不正は、それ自体では悪ではない。むしろそれは、そうした行為を処罰する任にある人々によって発覚されはしないかという気付きから生じる恐怖の結果として、悪なのである》(「主要教説34」、同上邦訳、84頁)

《ローマの敵はその軍団の力の前に次々と倒れていったが、予言者の力など借りなくても、共和国の未来を暗示する不吉な予兆には誰もが気づいていた。さらに最も安全な立場にいる人々でさえ、エピクロスの有名な格言の一つを否定することは難しかった。「他のことから身を守るのは可能だが、相手が死となると、われわれ人間は皆、城壁のない都市に住んでいる」。エピクロスの信奉者ルクレティウスがこの上なく美しい詩に書いているように、重要な点は、城壁をどこまでも高く築こうとする無駄な努力を捨てて、代わりに、喜びの追及に専念することだった。……(中略)……初期キリスト教徒、中でもテルトゥリアヌスは、エピクロス哲学のいくつかの特徴を称賛に値すると考えていた——友情の讃美、慈善と寛容の尊重、世俗の野心への疑い——しかし、四世紀初頭には、なすべきことは明白になった。原子論者には消えてもらわねばならない。エピクロス哲学の信奉者たちは、キリスト教共同体の外で、すでに激しい敵意を呼び起こしていた。背教者ユリアヌス(331頃—363)として知られる皇帝が、急激に勢力を増すキリスト教に対抗して、多神教を復活させようと試みた。多神教の神官たちが読むべき重要な作品のリストを作り、同時に、公然と排除したいいくつかの本の題名を書いた。「エ



ピク로스学派の論文は認めぬことにしよう」とユリアヌスは書いている。またユダヤ人も、ユダヤの伝統を捨てた者たちをapikorosつまりエピクロス学派と呼んだ》〔スティーヴン・グリーンブラット『一四一七年、その一冊がすべてを変えた』（河野純治訳、柏書房、2012年、103-4、129頁。強調は引用者。原著：Stephen Greenblatt, *The Swerve: How The World Become Modern*, Norton: New York, 2011)〕

《トーマス・ジェファーソンは『物の本質について』のラテン語版を少なくとも五冊所有しており、それ以外にもこの詩の英語版、イタリア語版、フランス語版を持っていた。『物の本質について』は彼のお気に入りの本の一冊で、世界は本質だけであり、本質は物質だけからなっている、という彼の信念を裏づけていた。さらに、ルクレティウスは、ジェファーソンが、無知と恐怖は人間存在に必要な要素ではないという確信を形成するのに一役買っていた。

ジェファーソンはこの古代の遺産を、ルクレティウスが予想だにできなかったであろう方向へ、だが一六世紀初頭のトマス・モアが夢見た方向へと持って行った。ジェファーソンは、『物の本質について』の詩人の主張とは異なり、公的生活における激しい競争から身を引きはしなかった。その代わりに、新たな共和国の設立にあたり、重大な政治的文書に、紛れもなくルクレティウスの表現を加えた。それは政府に向けられた言葉だった。政府の使命は、国民の生命と自由をまもることだけではなく、「幸福の追求」を支援することでもある。ルクレティウスの原子は軌道を逸れて、『独立宣言』に載せられていたのだ。……（中略）……人生哲学を尋ねてきた文通相手〔ジョン・アダムズ〕に、ジェファーソンはこんな返事を書いている。「私はエピクロス主義者である」》（同上、326-7頁、強調は引用者）

そしてモンテーニュもこう書いている。

《自然もまたわれわれにそれを強<sup>し</sup>める。自然はこう言う。「きみたちがそこへはいつてきたように、この世から出ていきたまえ。苦しむこともおそれおのくこともなく死から生へと渡ってきた同じ道を、生から死へ渡り返したまえ。きみたちの死は宇宙の秩序の一部分なのだ。世界の生命の一断片なのだ。

死すべき人間たちはたがいに生命を受け渡す。あたかも走者が<sup>たいまつ</sup>炬火を受け渡すように。（ルクレティウス『物の本質について』2-76、79）》（モンテーニュ『エッセー』、「哲学すること、それは……」、荒木昭太郎訳、『世界の名著19』、中央公論社、1967年、87頁）

《死の放逸は生のなかにあり、それなくしては生が生でなくなるだろう。そしてその中間にこそ神の子たる人間（Homo Dei）の立場があるのだ、——放逸と理性のただなかに、——ちょうど人間の国家も、神秘的な共同体と吹けば飛ぶような個体のあいだにあるように。……（中略）……人間は善意と愛のために、その思考に対する支配権を死に譲り渡すべきでない》（トーマス・マン『魔の山』、高橋義孝訳、新潮文庫（下）、302-3頁）

## 参考資料

### 「研究業績一覧」

#### I 著書

##### (1) 単著

『現代保守思想の振幅——離脱と帰属の間——』（新評論、1995年）

##### (2) 共著、共編著

- ① 「『危機の世紀』における世界と個人——ホッブズの時代の世界像のために」（祖川武夫編『国際政治思想と対外意識』、創文社、1977年、所収）\*\*
- ② 「イギリス政治思想における《ヴァイマル共和国》の影——W・ルイスを中心に」（宮田光雄編『ヴァイマル共和国の政治思想』、創文社、1988年、所収）\*\*
- ③ 「バベルの塔と人類の会話——マイケル・オークショット」（藤原保信・千葉 眞編『政治思想の現在』、早稲田大学出版部、1990年、所収）\*
- ④ 「新旧論・ノート——レオ・シュトラウスの政治思想をめぐる断章」（小野紀明・ほか『モダンとポストモダン 政治思想の再発見 I』、木鐸社、1992年、所収）\*
- ⑤ 「保守主義」（白鳥 令・佐藤正志編『現代の政治思想』、東海大学出版会、1993年、所収）\*
- ⑥ 「どこに住むべきか——「住むこと」の政治学・序説」（平野厚生・野中克彦編『社会・文明・環境』、梓出版会、1993年、所収）\*
- ⑦ 「バジヨット——権威・信用・慣習」（藤原保信・飯島蔭蔵編『西洋政治思想史 II』新評論、1995年、所収）\*\*
- ⑧ 「世論」（佐藤正志・添谷育志編『政治概念のコンテクスト——近代英国政治思想史研究』、早稲田大学出版部、1999年、所収）\*\*
- ⑨ 「ナチズム・戦時動員体制・企業国家——マイケル・オークショットの思想形成と戦争体験——」（宮田光雄・柳父圀近編『ナチ・ドイツの政治思想』（創文社、2002年、所収）\*\*
- ⑩ 「なぜ政治哲学なのか」「権力の遍在」（押村 高・添谷育志編『アクセス政治哲学』、日本経済評論社、2003年、所収）
- ⑪ 「政治／政治学とは何か」「デモクラシー」（明治学院大学法学部政治学科編『初めての政治学——ポリティカル・リテラシーを育てる』、風行社、2011年、所収、改訂版、2015年）
- ⑫ 「トマス・H・マーシャル」（杉田敦・川崎修編著『西洋政治思想資料集』、法政大学出版局、2014年）
- ⑬ 「自由と権力」（明治学院大学法学部政治学科編『政治学の扉——言葉から考える』、風行社、2015年、所収）

#### II 論文

- ① 「ホッブズ政治哲学の人間論的意味——生産活動・暴力死・他者」（『理想』No.496、1974年9月号）\*\*
- ② 「ホッブズとヘーゲル——比較解釈的研究試論」（『理想』No.510、1975年11月号）\*\*
- ③ 「浮動層の研究（一）」（阿部四郎氏との共著、（東北大学法学会『法学』第38巻3・4合併号、1975年）
- ④ 「現代イギリス政治思想の系譜(1)——政治の象徴劇——克蘭ストンからバジヨットへ」（『埼玉大学紀要〔社会科学篇〕』第27巻、1979年10月）\*\*
- ⑤ 「1970年代における階層意識（「階層意識」と「生活満足度」）変化——仙台市と福島市の場合」（『埼

玉大学紀要〔社会科学篇〕第30巻、1982年11月)

- ⑥ 「現代イギリス政治思想の系譜(2)——「海図なき海」への航海者あるいは「Conscienceの圧政」に抗して——M・オークショット論覚書(その1) (『埼玉大学紀要〔社会科学篇〕第33巻、1985年11月) \* \*
- ⑦ 「現代イギリス政治思想の系譜——「海図なき海」への航海者あるいは「Conscienceの圧政」に抗して——M・オークショット論覚書(その2・完) (『埼玉大学紀要〔総合篇〕第5巻、1987年3月) \* \*
- ⑧ 「L・シュトラウスとA・ブルームの「リベラル・エデュケーション」論」(東北大学法学会『法学』第55巻第6号、1992年) \* \*
- ⑨ 「政治とコミュニケーション——政治コミュニケーションアプローチ (『平成5年度文部省特定研究報告書』東北大学大学院情報科学研究科人間情報学専攻、1994年3月) \* \*
- ⑩ 「世論概念の変容と世論確認装置 (平成12年度～平成13年度科学研究費補助金(基盤研究(B)(1)) 研究成果報告書『世論調査環境の変容と「世論」概念及び政治意識の変化』(2002年)、所収) \* \*
- ⑪ 「「秩序」についての諸観念」(『東北大学大学院情報科学研究科社会情報学専攻共同研究成果報告書』2002年) \* \*
- ⑫ 「シュトラウス、グラント、そしてイグナティエフ」(研究報告書「レオ・シュトラウス政治哲学研究の方法による思想史研究と政治哲学の可能性」2005年2月) \* \*
- ⑬ 「大量虐殺の語源学、あるいは命名の政治学」(明治学院大学『法学研究』第90号、2011年1月) \* \*
- ⑭ 「なぜ自由が問題なのか? ——リベラルであることについての一試論」(明治学院大学『法学研究』第92号、2012年1月)
- ⑮ 「見知らぬ人びとの必要」—M・イグナティエフの問題提起をめぐって」(明治学院大学『法学研究』第97号、2014年) \* \*

### Ⅲ 紹介、書評、短評、訳者あとがき、その他のエッセイ

- ① 「マクファーソン氏のホップズ論」(東北大学法学会『法学』37巻3号、1974年) \* \*
- ② 書評〔五木寛之著『鳥の歌』講談社文庫、1979年刊行] (『Book and Memory』埼玉大学生協、1979年11月2日) \* \*
- ③ 「「政治哲学の復権」をめぐって——藤原保信氏の所説をめぐって (『社会科学の方法』第15巻第10号: 通巻第160号、御茶の水書房、1982年10月10日) \* \*
- ④ 書評「「懐かしさ」について」[小野紀明著『フランス・ロマン主義の政治思想』木鐸社、1986年刊] (『木鐸』第34号、1986年) \* \*
- ⑤ 「「政治哲学者」オークショットの形成——『経験とその諸様態』から『政治における合理主義』へ——」(マイケル・オークショット著『保守的であること——政治的合理主義批判——』(澁谷 浩氏ほかとの共訳、昭和堂、1988年、所収) \* \*
- ⑥ 「訳者あとがき」(バーナード・クリック著『現代政治学入門』(新評論、1990年、所収) \* \*
- ⑦ 同上 (レオ・シュトラウス著『ホップズの政治学』添谷・谷・飯島訳、みすず書房、1990年、所収) \* \*
- ⑧ 書評「源泉と教義と成果を究明——保守主義に関する基本文献の一つ [R・ニスベット著『保守主義——夢と現実』富沢克・谷川昌幸訳、昭和堂、1990年刊] (『週刊読書人』1990年8月6日) \* \*
- ⑨ 書評「民主主義への懐疑と共同体的全体性回復への希望 [京大政治思想史研究会編『現代民主主義と歴史意識』ミネルヴァ書房、1991年刊] (『週刊読書人』1991年10月28日) \* \*
- ⑩ 書評「現代の『リヴァイアサン』——オークショット政治哲学の集大成 [マイケル・オークショット著『市民状態とは何か』野田裕久訳、木鐸社、1997年刊] (『週刊読書人』1997年●月●日) \* \*

## 定例研究会

- ⑪ 「訳者あとがき」(マイケル・イグナティエフ著『ニーズ・オブ・ストレンジャー』(金田耕一氏との共訳、風行社、1999年、所収)
- ⑫ 書評「錯綜した現代政治哲学への道案内——諸論争へのきわめて重宝な「ガイド」」[ウィル・キムリック著『現代政治理論』千葉眞ほか訳、日本経済評論社、2002年刊] (『図書新聞』2002年4月20日) \*\*
- ⑬ 書評「二十世紀を代表するリベラルな政治哲学者バーリンの評伝」[M・イグナティエフ著『アイザイア・バーリン』石塚雅彦・藤田雄二訳、みすず書房、2004年刊] (『週刊読書人』2004年8月20日号) \*\*
- ⑭ 書評「ヴィクトリア朝英国における「知の支配」をめぐる闘争—「宗教」と「教育」に関する言説を焦点に」[清滝仁志著『近代化と国民統合——イギリス政治の伝統と改革』木鐸社、2004年刊] (『図書新聞』2004年6月5日号) \*\*
- ⑮ 書評「一般教養教育のあり方を論じて自由主義の原義への探求に到る——毒をもって毒を制する戦略」[レオ・シュトラウス著『リベラリズム 古代と近代』石崎・飯島訳者代表、ナカニシヤ出版、2006年刊] (『週刊読書人』2006年5月12日) \*\*
- ⑯ 「解説」(千葉眞・添谷有志編『政治理論のパラダイム転換』藤原保信著作集第8巻、新評論、2006年10月刊、所収) \*\*
- ⑰ 書評「このうえない刺激に満ちた知的道具箱——その包括性と個々の論考の質の高さ」[田中秀夫・山脇直司編『共和主義の思想空間——シヴィック・ヒューマニズムの可能性』名古屋大学出版会、2006年刊] (『図書新聞』2006年10月21日) \*\*
- ⑱ 「監訳者あとがき」(ティモシー・ガートン・アッシュ著『フリー・ワールド——なぜ西洋にとっての危機が世界にとってのチャンスとなるのか』(2011年、風行社、所収) \*\*
- ⑲ 「訳者あとがき」(マイケル・イグナティエフ著『許される悪はあるのか?——テロの時代における政治と倫理——』2011年、風行社、所収) \*\*
- ⑳ 書評「誰が、誰に対して、どのような物語を語りうるのか?——オークショットの「物語」論を手掛かりに」[岩田温『政治とはなにか』総和社、2012年刊および『だから、日本人は「戦争」を選んだ』オークラNEXT新書、2012年刊] (『政治哲学』2013年) \*\*
- ㉑ 書評「六八年世代によるひとつの思想的総括」[菊地理夫『ユートピア学の再構築——「リーマン・ショック」と「三・一一」を契機として』風行社、2013年刊] (『政治思想研究』2014年) \*\*
- ㉒ 「監訳者あとがき」(ティモシー・ガートン・アッシュ著『ダンシング・ウィズ・ヒストリー——名もなき10年のクロニクル——』風行社、2013年、所収) \*\*
- ㉓ 「訳者あとがき」(マイケル・イグナティエフ著『火と灰——アマチュア政治家の成功と失敗——』風行社、2015年、所収) \*\*

注記：\* = 加筆修正のうえ単著に収録；\*\* = 加筆修正のうえ『近代英国政治思想研究、およびその他のエッセイ——ホブズからオークショットまで——』(仮題：風行社より近刊予定)に収録予定。

## 翻訳

1. カール・フォアレンダー著『マキャヴェリからレーニンまで——近代の社会・国家理論——』(宮田光雄監訳、創文社、1978年、第四章「自然法—フーコー・グロティウスからクリスチャン・ヴォルフまで」；第五章「孤独な思想家たち—スピノザとマンデヴィル」；第六章「啓蒙時代の自由主義」；第七章「経済的自由主義の完成」分担)
2. マイケル・オークショット著『保守的であること——政治的合理主義批判——』(澁谷 浩氏ほかと

- の共訳、1988年、昭和堂)
3. レオ・シュトラウス著『ホッブズの政治学』(谷 喬雄・飯島昇蔵氏との共訳、1990年、みすず書房)
  4. バーナード・クリック著『現代政治学入門』(金田耕一氏との共訳、1995年、新評論、⇒2003年、講談社学術文庫として復刊)
  5. マイケル・イグナティエフ著『ニーズ・オブ・ストレンジャー』(金田耕一氏との共訳、1999年、風行社)
  6. バーナード・クリック著『一冊でわかる デモクラシー』(同上、2002年、岩波書店)
  7. マイケル・イグナティエフ著『ヴァーチャル・ウォー——戦争とヒューマニズムの間——』(金田耕一氏ほかとの共訳、2003年)
  8. エイミー・ガットマン編、マイケル・イグナティエフ・ほか著『人権の政治学』(金田耕一氏との共訳、2006年)
  9. ティモシー・ガートン・アッシュ著『フリー・ワールド——なぜ西洋にとっての危機が世界にとってのチャンスとなるのか』(監訳、2011年、風行社)
  10. マイケル・イグナティエフ著『許される悪はあるのか——テロの時代の政治と倫理——』(金田耕一氏との共訳、2011年、風行社)
  11. アンドリュウ・ギャンブル著『政治学／政治の諸限界』(『明治学院大学法律科学研究所年報』第27号、2011年度)
  12. ポール・ケリー編『20世紀における英国政治理論』(「序論」および「第一章」の翻訳、同上、第28号、2012年度)
  13. マイケル・オークショット著『歴史について、およびその他のエッセイ』(中金 聡氏との共訳、2013年、風行社)
  14. ティモシー・ガートン・アッシュ著『ダンシング・ウィズ・ヒストリー——名もなき10年のクロニクル』(監訳、2013年、風行社)
  15. マイケル・イグナティエフ著『火と灰——アマチュア政治家の成功と失敗——』(金田耕一氏との共訳、2015年、風行社)

#### IV 学会報告

- ① 「〈Active Citizenship〉と保守主義の「深化」」(1994年度日本政治学会研究会報告、1994年10月、関西大学) \*\*
- ② 「マイケル・ヤング、「古い」を論ず」(2001年度日本イギリス哲学会 第25回総会・研究大会 シンポジウムⅡ 「古い」について、2001年3月29日、慶應義塾大学)